



ダビデが祈り求めた平和への切なる願い
詩篇72篇

戦後79年を迎えた日本。私たちは、戦争を直接経験していない世代です。しかし、戦争の悲劇を決して風化させてはなりません。そのためには、戦争の恐ろしさや無意味さを語り続けることが重要です。たとえば、広島と長崎での原爆投下や、東京大空襲によって多くの市民が犠牲になったことは、私たちが決して忘れてはならない歴史的な出来事です。

これらの事実は、戦争がどれほど多くの人々に悲劇をもたらすかを示しています。そして、戦争はどのような理由があっても避けるべきだという強いメッセージを私たちに与えています。

しかし、世界を見渡してみると、すべての国がこの教訓を学んでいるわけではありません。例えば、ウクライナとロシアの紛争や、中国による南シナ海での領土拡張など、他国の領土や権利を侵害する行動が頻繁に報じられています。これらの国々は、まず他国の領土に少しずつ手を出し、その反応を見てさらに行動を拡大するという戦略を取っています。

また、北朝鮮が繰り返しミサイル発射を行い、国際社会を脅かしている状況も同様です。これらの事例は、国際社会がいかに不安定で、いつ新たな紛争が勃発するかわからないという現実を示しています。

このような現状を踏まえると、私たちは改めて戦争の悲惨さを忘れず、平和を守るために何ができるかを考える必要があります。そして、戦争を防ぐために、国際社会との連携を強化し、対話と外交を通じて平和を維持する努力を続けていくことが重要です。

詩篇 72:1-20 JCB (リビングバイブル)

「ああ神よ。王が、あなたが行うように政治を行い、王子が神を恐れて暮らすように、助けてください。王が、神の民にはもちろんのこと、貧しい人にも公平であるように、助けてください。王のすぐれた治世^{ちせい}を反映して、山や丘には草木が生い茂りますように。王の手で貧しい者や困っている者が手厚く保護され、虐待する者たちは容赦なく懲らしめられるようにしてください。貧しい者や困っている者が、太陽や月が空にかかっている限り永久に、いつも神に対して敬虔^{けいけん}でありますように。約束された王子は、牧草地^{ぼくそうち}に降る春の雨のようにおだやかに、世を治めますように。地を潤す夕立のように、人々を豊かにしますように。彼の治世においては、正しい者が栄え、永遠に平和を楽しみますように。その支配は東の海から西の海に至るまで、ユーフラテス川から地の果てにまで及びますように。砂漠の遊牧民^{ゆうぼくみん}は彼の前にひれ伏し、敵はひざまずくでしょう。タルシシュや地中海に浮かぶ島々の首長^{しゅちやう}、シェバやセバの王侯^{おうこう}はみな、貢ぎ物^{みつぎもの}を納めるでしょう。それどころか、全地^{えんご}の王が頭を下げ、すべての人が彼に仕えるでしょう。彼は、身寄りのない者や貧しい者を援護します。弱っている者や困っている者を見ると、いても立ってもいられず、助け上げるのです。彼は、虐待されたり痛めつけられたりしている人を、黙って見過ごしにはできません。彼にとって、このような者たちのいのちはとても大切なものなのです。彼は長生きし、シェバから黄金を贈られます。絶えず称賛^{しょうさん}を受け、民も一日中祝福を祈ってくれます。どうか、平野ばかりか高原にも、豊作の恵みをもたらしてください。レバノンのような実り多い地にしてください。青々とした野原のように、町を人々であふれさせてください。この方の名は太陽のように永遠にあがめられます。すべての人はこの方によって祝福され、世界中の国々がこの方をほめたたえます。イスラエルの神に栄光がありますように。この方こそすばらしいことをしてくださるのです。栄光に輝くこの方の御名を、永遠にほめたたえなさい。主の栄光^{さんか}が全世界を照らしますように。アーメン。アーメン。(エッサイの子ダビデの賛歌は、ここで終わります。)」

詩篇72篇の背景

第一巻：詩篇1篇～41篇、第二巻：詩篇42篇～72篇、第三巻：詩篇73篇～89篇、第四巻：詩篇90篇～106篇、第五巻：詩篇107篇～150篇（内：著者ダビデだとされるものが73篇ある）

詩篇72篇はダビデが書いたものとされています。(時代は不明)だが、紀元前1,000年頃の文章だとされます。(幾つかある説のひとつです)日本の歴史においては縄文時代後期から晩期にあたり、日本では文字がなく、主に土器や石器を使用した時代とされています。中国では西周時代で封建制度が発展し地方を統治する体制が確立されました。周の王たちは「天命(てんめい)」という概念を打ち立て、天から与えられた権利に基づいて統治を行っていたとされています。

詩篇は、大きく嘆きの詩篇と賛美の詩篇とに別れ、詩篇72篇は**賛美の詩篇と王の詩篇**とに分類される。とくに**メシア待望**が書かれ、平和・待望・まことの王が記されている。

詩篇72篇は、旧約聖書の「詩篇」に含まれる詩の一つで、「ソロモンのために」として知られています。この詩篇は、王の治世が正義と平和によって祝福されるようにと願う祈りの詩であり、理想的な王の姿を描写しています。伝統的に、この詩篇はソロモン王に関係しているとされていますが、一部の解釈では、**メシア的な王国に関する預言**と見なすこともあります。

詩篇72篇の概要

この詩篇は、全体として神が王に正義と裁きを授けるように願う内容になっています。王が正しい判断を下し、貧しい者や困っている者を守り、敵から解放することが強調されています。また、王の治世が永続的であり、豊かな平和がもたらされることを求めています。

1. 正義と公正の支配

詩篇の冒頭では、神が王に正義を授けることを願う祈りが表されています。

「神よ、あなたの公平を王に、あなたの義を王の子にお与えください。」(詩篇72:1)

この部分では、王が神の導きの下で正しい裁きを行い、公正に統治することが強調されています。

2. 弱者への保護

詩篇72篇は、王が貧しい者、困っている者を特に守り、助けることの重要性を強調しています。

「彼は民の中の貧しい者を救い、困っている者を助ける。」(詩篇72:12-13)

このように、正しい王の統治は、弱者への慈悲と保護によって特徴づけられます。

3. 平和と繁栄

この詩篇はまた、王の治世が豊かで平和に満ちたものであることを祈ります。

「彼の治世の間、義が花開き、平和が豊かにありますように。」(詩篇72:7)

ここでの平和は、単なる戦争の不在を意味するだけでなく、繁栄と調和の中で神の祝福が満ちる状態を指しています。

4. 王国の永続性

詩篇72篇では、王の統治が長く続き、その影響が広がることも求められています。

「彼の名は永遠に続き、その名は日の下で続くでしょう。」(詩篇72:17)

この部分は、王国の永続性と広がりをお願いするものとして解釈されます。

5. メシア的解釈

一部の解釈では、この詩篇はメシア的な王国、すなわちイエス・キリストの到来とその永遠の王国を予表しているとされています。そのため、キリスト教の伝統では、詩篇72篇がメシアに関する預言と見なされることもあります。

結び

詩篇72篇は、理想的な王の統治を描く詩篇であり、その治世が正義、平和、繁栄に満ちたものであることを願う祈りです。この詩篇は、ソロモン王の治世を念頭に置いて書かれたと考えられていますが、同時に、メシア的な希望や神の王国の理想をも表していると解釈されることがあります。

聖書からみるダビデの人生 そして詩篇72篇に至る

ダビデはイスラエルの歴史において最も重要な王の一人であり、その生涯は旧約聖書のサムエル記、列王記、歴代誌に詳しく記されています。彼の生涯は、羊飼いや王に至るまでの劇的な物語であり、信仰、戦い、失敗、そして贖罪の物語でもあります。以下に、ダビデの生涯の主要な出来事を時系列でまとめます。

1. 誕生と羊飼いやとしての少年時代

出身地と家族: ダビデは、エッサイという名の父親を持つ家の八男として、ベツレヘムで生まれました（サムエル記上16:11-13）。彼は若い頃、家族の羊を守る羊飼いやとして働いていました。

油注ぎ: 預言者サムエルは、神の命令によりダビデに王としての油を注ぎました。このとき、ダビデはまだ少年であり、彼の兄たちや家族は驚きました（サムエル記上16:1-13）。

2. ゴリアテとの戦い

ゴリアテの挑戦: イスラエルとペリシテ人との戦いの中で、巨人ゴリアテがイスラエルの軍勢を侮辱しました。ダビデは羊飼いやの経験を活かし、石投げ器と石でゴリアテを倒しました（サムエル記上17:1-50）。この勝利によって、ダビデは一躍イスラエルの英雄となります。

3. サウル王との関係と逃亡生活

サウル王の嫉妬: ゴリアテを倒した後、ダビデはサウル王の側近となり、彼のために戦いました。しかし、ダビデの人気が高まるにつれて、サウル王は彼に嫉妬し、命を狙うようになりました（サムエル記上18:6-16）。

逃亡生活: ダビデはサウルの怒りを逃れるために、イスラエル各地を転々とする逃亡生活を余儀なくされました。彼は洞窟や荒野に隠れ、仲間たちとともにサウル王から逃れました（サムエル記上19章以降）。

4. サウル王とヨナタンの死

サウル王の最期: サウル王はペリシテ人との戦いで息子ヨナタンとともに戦死しました（サムエル記上31章）。ダビデはサウル王とヨナタンの死を深く悲しみ、哀歌を詠みました（サムエル記下1:17-27）。

5. ユダの王としての即位とイスラエル統一

ヘブロンでの王位: サウル王の死後、ダビデはユダの部族によってヘブロンで王として即位しました (サムエル記下2:1-4)。彼は7年半の間、ユダの王として治めました。

イスラエル全体の王に即位: サウルの家が衰退する中、ダビデはイスラエル全体の王として選ばれました。彼はエルサレムを首都とし、そこに王宮を建設しました (サムエル記下5:1-5)。

6. エルサレムの征服と神殿計画

エルサレムの征服: ダビデはエルサレムを攻略し、イスラエルの首都としました。この都市は「ダビデの町」として知られるようになりました (サムエル記下5:6-10)。

契約の箱の移動: ダビデは、契約の箱をエルサレムに運び入れ、神の臨在がその都市にあることを示しました (サムエル記下6:12-19)。

神殿建設の計画: ダビデは神のための神殿を建設しようと計画しましたが、神はその任務を息子ソロモンに委ねるよう命じました (サムエル記下7:1-17)。

7. バト・シェバとの罪とその結果

バト・シェバとの不義: ダビデはヘテ人ウリヤの妻バト・シェバと不倫関係を持ち、彼女が妊娠すると、ウリヤを戦場で死なせるように指示しました (サムエル記下11章)。

ナタンの指摘と悔い改め: 預言者ナタンはこの罪を指摘し、ダビデは深く悔い改めました (サムエル記下12:1-14)。しかし、この罪は彼の家族に多くの混乱をもたらしました。

8. 家庭の不和と反乱

アブサロムの反乱: ダビデの息子アブサロムは、父に対して反乱を起こし、一時的にエルサレムを奪いました。ダビデは逃亡を余儀なくされましたが、最終的にアブサロムは敗北し、殺されました (サムエル記下15-18章)。

家庭の悲劇: ダビデの家族内では、息子アムノンが異母妹^{いぼいもうと}タマルを辱め、その結果タマルの兄アブサロムがアムノンを殺害するなど、多くの悲劇が続きました (サムエル記下13章)。

9. 晩年とソロモンへの継承

ダビデの晩年: ダビデは年老いてからもイスラエルを統治しましたが、晩年には後継者問題が浮上りました。息子アドニヤが王位を狙いましたが、ダビデはバト・シェバの息子ソロモンを次の王として指名しました (列王記上1章)。

最後の言葉と死: ダビデはソロモンに王としての務めを託し、イスラエルを神に従って統治するように命じました。ダビデは70歳で亡くなり、エルサレムに葬られました (列王記上2:1-12)。

まとめ

ダビデの生涯は、神に選ばれた王としての成功と、個人的な失敗の両面を持つものでした。彼は信仰深い王であり、イスラエルの歴史において重要な人物ですが、同時に人間的な弱さや罪を持つ存在でもありました。ダビデの物語は、神の恵みと赦しがどれほど重要であるかを教えてくれるとともに、リーダーシップの責任や家族の問題の影響についても深い教訓を与えています。

以下は日本聖書協会の新共同訳聖書からの引用です。

詩篇 72篇

1. 神よ、あなたの公平を王に、あなたの義を王の子にお授けください。
2. 彼は公正をもってあなたの民を裁き、貧しい人々に正義を行うでしょう。
3. 山々が、平和を民にもたらし、丘々が正義をもたらしますように。
4. 彼は民の中の貧しい人々を守り、困っている者たちを救い、虐げる者を打ち砕くでしょう。
5. 彼は、太陽の前に、月の前に、とこしえに存続するでしょう。
6. 彼は、刈り取った草の上に降る雨のように、地を潤す降り注ぐ雨のように降るでしょう。
7. 彼の治世の間、正義が花開き、平和が豊かにありますように、月のなくなる時まで。
8. 彼は、海から海に、川から地の果てまで支配するでしょう。
9. 彼の敵は彼の前にひざまずき、彼の敵はちりをなめるでしょう。
10. タルシシュの王たちと島々の王たちは贈り物を持ち、シェバとセバの王たちは貢ぎ物を献げるでしょう。
11. すべての王たちが彼にひれ伏し、すべての国々が彼に仕えるでしょう。
12. 彼は、貧しい人が助けを求めるとき、また、困っている者が救いを求めるとき、彼を救うでしょう。
13. 彼は、弱い人と貧しい人をあわれみ、貧しい人々のいのちを救うでしょう。
14. 彼は、彼らのいのちを圧迫と暴力から贖い出すでしょう。彼らの血は彼の目に貴いものとされます。
15. 彼は生き長らえ、シェバの黄金が彼に与えられ、彼のために常に祈りがささげられ、終日彼を祝福するでしょう。
16. 地には豊かな穀物があり、その実りはレバノンのように山頂に揺れるでしょう。町々の人々は、地の草のように咲き誇るでしょう。
17. 彼の名はとこしえに続き、彼の名は太陽のもとに永遠に存続し、すべての国々の民が彼によって祝福され、彼を祝福するでしょう。
18. イスラエルの神、主は、賛美されますように、ただ一人、驚くべき御業を行われる主が。
19. その栄光ある御名がとこしえに賛美され、全地がその栄光で満たされますように。アーメン、アーメン。
20. エッサイの子ダビデの祈りはここで終わります。

聖書 新改訳2017©2017新日本聖書刊行会

0、ソロモンのために

- 1、神よあなたのさばきを王にあなたの義を王の子に与えてください。
- 2、彼が義をもってあなたの民をさばきますように。公正をもってあなたの苦しむ民を。
- 3、山も丘も義によって民に平和をもたらしますように。
- 4、王が民の苦しむ者たちを弁護し貧しい者の子らを救い虐げる者どもを打ち砕きますように。
- 5、彼らが日と月の続くかぎり代々にわたってあなたを恐れますように。

- 6、王は牧草地に降る雨のように地を潤す夕立のように下って来ます。
 - 7、彼の代に正しい者が栄え月がなくなるときまでも豊かな平和がありますように。
 - 8、海から海に至るまで川から地の果てに至るまで王が統べ治めますように。
 - 9、砂漠の民は王の前に膝をつき王の敵はちりをなめますように。
 - 10、タルシシュと島々の王たちは貢ぎを納めシェバとセバの王たちは贈り物を献げます。
 - 11、こうしてすべての王が彼（メシア）にひれ伏しすべての国々が彼に仕えるでしょう。
 - 12、それは王が叫び求める貧しい者（霊性において、魂の飢え渴き：神に頼らなければ生きていけないと悟った者）や助ける人のない苦しむ者を救い出すからです。
 - 13、王は弱い者や貧しい者をあわれみ貧しい者たちのいのちを救います。
 - 14、虐げと暴虐から王は彼らのいのちを贖います。王の目には彼らの血は尊いのです。
 - 15、どうか王が生き続け彼にシェバの黄金が献げられますように。王のためにいつも彼らが祈り絶えず王をほめたたえますように。
 - 16、大地には穀物が豊かにあり山々の頂では実がレバノンのようにたわわに揺れ町の人々は地の草花のように咲き誇りますように。
 - 17、王の名がとこしえに続きその名が日の照るかぎり増え広がりますように。人々が彼によって祝福されすべての国々が彼をほめたたえますように。
 - 18、ほむべきかな神である主イスラエルの神。ただひとり奇しいみわざを行われる方。
 - 19、とこしえにほむべきかなその栄光の御名。その栄光が全地に満ちあふれますように。アーメン、アーメン。
 - 20、エッサイの子ダビデの祈りは終わった。
- 詩篇 72篇1～20節

ダビデの人生から観る詩篇72篇

ダビデ王は、イスラエル王国の二代目の王として、隣国や国内で多くの争いを経験しました。彼の治世中に行われた戦争は、イスラエル王国を強固にする一方で、国内外での対立を引き起こしました。以下に、彼がどのように隣国や国内で争いを繰り返したかを順序立てて説明します。

まず、隣国との争いについてです。ダビデは、イスラエルを取り囲む敵対的な国々と頻繁に戦いました。特に重要なのが、ペリシテ人との戦いです。ペリシテ人はイスラエルの宿敵であり、ダビデは彼らを打ち破ることでイスラエルの安全を確保し、領土を拡大しました。また、アモン人やモアブ人、エドム人、アラム人といった周辺諸国とも戦い、これらの国々を従属させることで、イスラエルの影響力を広げました。

次に、国内での争いについてです。ダビデは、王となる前にも同国内での対立を経験しました。若い頃、初代の王サウルとの間で激しい緊張がありました。サウルはダビデをライバル視し、命を狙ったため、ダビデは長い間逃亡生活を送りました。最終的にサウルが戦

死したことで、ダビデは王位に就きましたが、この期間の争いはイスラエル国内に大きな影響を与えました。

さらに、ダビデの治世中にも国内で大きな反乱が起こりました。最も有名なのは、彼の息子アブサロムによる反乱です。アブサロムは父ダビデに反旗を翻し、一時はエルサレムを支配するほど勢力を拡大しました。この内乱はダビデにとって大きな試練となり、イスラエル内部に深刻な混乱を引き起こしました。

このように、ダビデは隣国と戦争を繰り返しながら、同時に国内でも反乱や対立に直面しました。彼の治世は、戦争と平和の維持のために絶え間ない努力を要するものであり、それが彼の王国を強力なものにする一方で、多くの困難を伴ったことは明らかです。

ダビデ王には、彼の治世の中で非常に問題となる行動をとった出来事があります。それは、彼が自らの欲望を満たすために部下を殺害する計画を立てたという史実です。この出来事は、旧約聖書の「サムエル記」下の11章に記録されています。

ダビデ王はある日、宮殿の屋上からバテシバという美しい女性を見かけ、彼女に強く惹かれました。バテシバはヘト人ウリヤというダビデの忠実な部下の妻でしたが、ダビデは彼女を自分のもとに呼び、関係を持ってしまいます。後にバテシバが妊娠したことが分かると、ダビデは事態を隠蔽しようとしてしました。

まず、ダビデはウリヤを前線から呼び戻し、彼が妻と一夜を共にすることで妊娠の責任を彼に負わせようとしてしました。しかし、ウリヤは戦場にいる仲間を思い、妻のもとに帰ることを拒否しました。そこでダビデは、さらに悪質な策を講じました。

ダビデは、ウリヤを戦場の最も激しい戦闘が行われている場所に配置するよう命じ、その後、他の兵士たちを撤退させてウリヤを孤立させました。結果として、ウリヤは戦闘で命を落としました。ダビデはこの計画を成功させた後、バテシバを自分の妻として迎え入れました。

しかし、この行為は神の目には非常に重い罪と見なされました。預言者ナタンはダビデに対して神の裁きを告げ、ダビデの家族に不幸が訪れることを予告しました。この事件はダビデの治世に大きな影響を与え、彼の道徳的権威を揺るがす結果となりました。

このエピソードは、ダビデ王の人間的な弱さと、それが彼の王としての責務にどのように影響を与えたかを示す重要な史実です。